
結婚式場バイト案内係・ケン

中部 航

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結婚式場バイト案内係・ケン

【Zコード】

Z0968K

【作者名】

中部 航

【あらすじ】

大学3年の春。山本ケンのバイト先である結婚式場に、一つ後輩の金谷理香が入ってきた。結婚式場でバイトをしながら、ケンと理香は恋人同士となり…… 【職業小説企画 参加作品です】

【つぼみ】新人バイト・理香

4月初めの土曜日、帰省から戻ってきたセントラル大学3年、山本ケンは今日もバイト先である結婚式場、グランドクリスタルパレスに出勤した。

この結婚式場は大小合わせて7つのホールがあり、多数のバイトが働いている。ケンは1年生の春からここに勤めて3年目。かなり古株と言つことになるだろう。

北東北出身のケン、元々は地元の大学に進む予定だったのが、記念受験した名門・セントラル大学の工学部に受かってしまい、教師の強いすすめで進学。

ただ、親の用意してくれた学費と仕送りだけでは物価の高い都会で生活するのは難しいため、金のかかるクラブ活動は断念し、学業とバイトとという大学生活を送ることにした。

突然の都会への進学のため、初恋相手の彼女、洋子とは遠距離恋愛が破綻している。

一方で、グランドクリスタルパレスの女先輩たちが遊びに誘つてくれたおかげで退屈はしなかつた。クラブ活動をしていないため、いつも遊び相手になるところが好まれたのだろうか。

ただ、「後輩以上恋人未満」という立場にすぎず、洋子との熱愛を経験したケンは満たされない日々を過ごしていた。その女先輩たちも卒業し、新たな季節を迎えた……

ケンは、グランドクリスタルパレスの制服である水色のブレザーにネクタイを締め、襟に輝くキャンドルの形をした銀バッジの傾きを直すと、ミーティングに臨んだ。

今日の仕事は、ロビーでのお客様案内係。部下として同じ大学の後

輩が数名付く。

その中に、初めて見る女の子がいた。金谷理香^{かなや りか}、経済学部2年生。2月からここに入り、裏方をしながら研修してきたが、今日が案内係初デビュー。

丸顔のむちっとした体型で大きな尻がスーツのスカートを膨らませている。ちょっと化粧が垢抜けしないのは、接客に慣れていないためだらうか。

自己紹介のあと皆は配置につぐ。ケンは、理香を自分の傍らに置き、仕事の流れを見てもらうこととした。

最初の組の開式が迫り、お客様が三々五々お越しになる。

「おめでとうござります。本日はぜひいらの式に……」 「さん の……」

お客様に控室を「案内したり、式服を持ってきた方には更衣室の」案内を淡々とこなしていく。

耳に付けたインカムからは、式の進行状況が流れている

「ルビーの間、 家 家の新婦様、着付けが10分遅れています」「了解」

大半はケンに関係のない情報だが、中には重要な情報もあるので、聞き流しているわけにはいかない。

「山本くん、 家のご親族を乗せた 観光バスが到着したら主任の所まで知らせて下さい。 様のお父様がお出迎えになりたいそうですね」「山本了解しました」

理香も、配置表を見ながら、たどたどしく述べ案内している。「控室は……」「公衆電話は……」「お手洗いは……」

こんな忙しい時間の中で、ケンの密かな楽しみは、新婦友人のドレス姿を見ることがある。

胸を強調したり、胸元が大きく開いたり、すらつとした脚がむき出しになつたり……友人のために精一杯綺麗に着飾つた女の子たち。ばれないうちに胸元や脚に視線を動かして目の保養。時には「はどこですか」と騒々しいロビーで耳に息を吹きかけるみたいに体を寄せてくる子もいて、どきまきしたりする。

でも、今日は違つていた。

隣に並んで立つてゐる理香の事が気になつて仕方がない。着飾つた友人たちも確かに綺麗だが、純朴でどこか頼りなさそうな理香。今まで付き合つたことのないタイプだが、理香をチラ見すると胸が少しキュンとした。

理香はと言えば、初めてのロビー仕事で、緊張しているのがありますと分かる。

ケンに質問する声も緊張しまくつていた。

「山本くん、　家　　家の式が始まると誘導よろしく」 「山本了解」 インカムから指示が流れ、ロビー脇にある来賓・友人控室の列席者に声をかける。

「大変長らくお待たせしました」 室内にいる人たちが私語をやめ、一斉にケンの方を向く。大勢の人の目がケンに注がれているのが痛いほど分かる。

「只今から『　家・　家』 のチャペル挙式を開式いたします……なお、このお部屋はこの後使用しませんので、お忘れ物のないよう」 …… 扉の外には、チャペル担当のスタッフが立つており、先導を託した。

このあと、15分～30分間隔でお客様を同じように挙式会場へお送りすると、お客様はそのまま写真→披露宴へと入るので、ロビーは少しの間、閑散とする。

「山本さん、お待たせしました」先に食事を済ませた後輩たちが声を掛けてくれた。

「金谷さん、ご飯食べに行こうか」「はい」
社食のテーブルにはおかずとサラダがずらりと並んでいて、ケンと理香はカウンターから温かいご飯と味噌汁、お茶をもらうと、並んでテーブルに着いた。（テーブルには到着順に詰めて座る決まり）

「金谷さん、緊張した？」

「はい」

ケンは色々話し始めた。理香は静岡出身の下宿生。花嫁のドレスにあこがれてこのグランドクリスタルパレスに入り、今日が初めての接客デビュー。

「山本さん、ロビー担当だと花嫁さん見れないんですね」

「うん。着付け室も式場も全部2階から上にあるから、1階の宴会場を使わない限りはロビーでは見られないよ」

確かに、ロビー係をしている時は新婦のドレス姿を見ることはない。1階のホールは導線が不便なのであまり結婚式には使っていないのだ。（導線分離の観点から、一般的のパーティや法事後の会食に使われることが多い）

早朝、新婦さんが緊張気味にハイヤーで乗り付けるときも、夕方、新郎と寄り添つて退館するときも軽いスーシや私服姿。だから、余計に新婦友人のドレス姿が目にまぶしいのだ。

自宅着付でもあると、田の前を通る姿を見ることができるが、今日は自宅着付けはない。

さらに、ケンのようなベテランになると、時には会場係として宴会場の中に入る事はあるが、理香のような新人だと難しいだろう。（最初から配膳係として採用されていれば新婦さん見放題なのだが、配膳係は意外と忙しく、ゆっくり見られないのだと）

短い食事時間ではあつたが、話すことで理香の緊張もほぐれた様子だ。

ロビーに戻った理香は時折笑顔を見せていた。かわいい……
理香もケンの方をちらちらと見ているのか、時々目が合いつ。

つかの間の、そんなのんびりした時間はインカムからの指示で終わりを告げた。

「山本くん、 家 家の披露宴、現在花束。配置確認して下さい」 「山本了解」

(「花束」とは随分ひどい隠語だなあ。「新郎新婦から両親への花束贈呈」という、一番のクライマックスなのに)

そう思いながらも、ロビー係の後輩たちに声を掛け、配置についてもういちど。

お客様がエスカレーターから降りてきはじめた。大きな引き出物をぶら下げ、ほろ酔い加減で楽しそうに降りてくる。が、ロビーは戦場だ。

無線配車のタクシーにお客様をお乗せしたり、貸切バスの誘導、更衣室やロッカールーム、授乳室の案内、引き出物を宅配便で送る方への手続き、写真のシャッター押し。

15～30分間隔で披露宴がお開きとなり、その都度大勢の列席者がぞろぞろと降りてくる。

と、タクシー乗り場を見ると、理香が中年のお客様に叱られていた。
理香がしどろもどろになっているので

「お客様、如何なされましたでしょうか？」／金谷さん、どうしたの？」

「どうもこいつもないよ……つたく」理香がタクシー配車の順番を間違え、後に頼んだお客様を先に来た車に乗せてしまったらしい。

傍らのタクシー ポールで確認すると、後の車はあと15分ぐらい掛かるとのこと。

「私どもの手違いで申し訳ございません。あと15分ぐらいかかりますので……」

「何?」お客様は気分を害したようだ。そこで

「お車が到着しましたらお呼びしますので、それまでお飲み物でも如何でしょうか」と喫茶室に移動してもらい、コーヒーを出してもらつた。

15分後。タクシーが到着したので、ケンは自分で喫茶室にお客様を呼びに行つたら機嫌が直つてあり、丁重にお見送り。

「山本さん、すみません」

「大丈夫だよ。この手のミスは誰でもするものだから

「はい」そう答える理香。ケンのことをじつと見つめていた。

この日最後の披露宴がお開きになり、お客様の大半がお帰りになつたところで館内の忘れ物チェックをロビー係全員で始めた。植木鉢の中や椅子の下まで念入りにチェックする。つけ慣れない宝飾品を付けてくるお客様が多く、指輪やイヤリングが落ちているなんてことはしそつちゅうで、デジカメやコード、携帯電話などもよくみつかるのだ。

理香は何をしていいのか分からぬのか、ケンの後をついて歩くばかり。アヒルの親子じゃないんだから……ケンは苦笑した。

が、ケンに寄り添う理香の姿を見て、ケンは自分でも信じられない行動に出た。

「理香さん、この後お時間ありますか?」「え?」「お、お茶でも

……」「はい」

ケンの声も上ずつていたし、理香の顔も真っ赤だつた。

締めのミーティングを済ませ、着替えたケンはグランドクリスタルパレスの向かいにあるスター・バックスに入った。

今日会つたばかりなのに、何だろう、この気持ちは。胸が締め付けられそうだ。でも、本当に来てくれるのだろうか？初対面で図々しかつたかも……と心配していると

理香が現れた。軽い上着にジーンズ姿。脚は太めなのか、ジーンズの太ももははち切れそうだ。

「や、山本さん……すみません。お待たせして」と椅子に腰掛けた。「いえいえ。慣れてる職場だもん。速攻で着替えられたから……急がせちゃつた？」

「…………すみません、こんな野暮つた格好で」

「そんなことないよ。それより、理香さんは男の人と一人で居るところ見られても大丈夫なの？」

「大丈夫です。私、彼氏とかいませんから」

「コーヒー飲んでいく？、それともご飯食べに行く？
「お腹空いたから食事でいいですよ」

近くのイタリア料理店で軽いコースを頼みながら、色々話をする。理香は入学直後、サークルに入つたものの、あまりにも行事が多く、学業の妨げになるとお金もかかるので1ヶ月で退会。

クラスで友達を作つた後はのんびりしていたが、ちょっと苦しいので夏からショッピングセンターの裏方でバイトを始めた。つまらな仕事を続けていたものの、年明けにリストラで解雇。どうせならと華やかそうな結婚式場に入ってきたというわけだ。彼氏はない。

ケンの事も色々聞き出された。高校時代、熱愛関係にあつた彼女・洋子がいたが、心の準備が出来ないまま突然の遠距離恋愛。洋子と同じ大学に進学した友人によると、（恋愛慣れしていない）洋子は、同じ大学の男に言い寄られたという情報。問い合わせることもなく自然消滅した。

食事のあと、どちらともなくカラオケに行こうということになった。カラオケボックスの部屋で、理香はなんとカクテルを注文。「理香さん、未成年なのに……」「えーっ、ちょっと舐めてみるだけだから」

といいつつも、理香はあっさりと1杯開けてしまった。顔は真っ赤で歌どころでは無い様子。1時間もすると、理香は顔を真っ赤にして歌どころではないようだ。

歌っているケンに寄りかかって、腕を絡めてきた。理香の髪の匂いが鼻を心地良いくすぐっている。

カラオケボックスから出て、足元もおぼつかない理香を送り届けた。
「理香さん、ここでいいの?」「うん、ありがとうございます?」「じゃあ、おやすみ」「ねえ、ケンさん……また会つてもらえますか?」「うん。喜んで」手を握りあって、理香は女性専用アパートの扉の奥に入つていった。

【三】告白

その後も仕事の後に食事、といつパターンが続き、手をつないだりするぐらいで進展がなかつた。

理香は男とつきあつた経験がないので、がつついてはだめだと思つたのだ。

そして、「ゴールデンウイークのある日のこと。

ゴールデンウイークは挙式数自体はそんなに多くないが、家族持ちのスタッフが休みを取りたがるので、イレギュラーな配置になる。

今日のケンは、披露宴会場のパーサー（黒服の補助係）。

エメラルドの間で、スポットライトを操作したり、飲み物を補充したり、お客様の席の間を回つて要望を伺つたりする仕事だ。去年、数回やつている。

さらに、理香も同じ会場で配膳係を命じられた。前日、それを聞いた理香は

「うれしい～つ。やつと花嫁さん見られるのね」

「理香あ……花嫁に見とれて仕事サボるんじゃないぞ」「は～い

……理香は浮かれきつていた。

お客様の入る前の宴会場・エメラルドの間。いつもと違う制服に身を包み、落髪防止のため髪を結い上げた理香に見とれながらも黒服ルームキヤップの指示に従つて準備をしていく。

今日は、理香の他にも理香の友人、実咲もロビー係から応援として入つていた。

キャンドルサービスのろうそくやトーチ、マイクなどを点検しつつ、緊張して準備している理香と実咲に声を掛ける。

実咲は緊張しまくつていたし、理香は花嫁を見られるのでわくわくしていた。ケンと同じ会場なので油断しきつっていたのかもしない。

お客様が入ってきたので、お席に「案内ののちに披露宴が開宴した。ケンが照らすスポットライトに、真っ白なドレスを着た新婦様と、緊張と幸せが入り交じった表情をしている新郎様。高らかな拍手の中、二人がメインテーブルに着席し、会場が明るくなるとスポットは一時お休み。後ろに立っている理香を見ると、顔を真っ赤にしていた。

型どおりの挨拶と乾杯が済むと、配膳係は戦闘態勢。

厨房で作られた温かいお料理を次から次へと出していく。

男性のお客様はお料理を食べるのが早く、出した端から器が空いていき、それを下げて行かなくてはならない。ケンも手が空くと下げるのだけは手伝うが、理香の顔からは汗が噴き出していた。

（ただ、器が下げるお席は新郎友人などのお席の方が後の料理が出しやすいので、理香と実咲は新郎友人席担当だった。……ちなみに、出し忘れや一重出しを防止するため、そのテーブル担当者以外は料理を出してはいけない規則）

黒服が襟元を擦る仕草をしたので、ケンがスポットライトに取り付くと

「それでは、新郎新婦様、お色直しのため退場です」とアナウンスが流れ、会場が暗くなつた。真っ白なドレスを着た新婦をスポットで追いながら、ケンはそれとなく理香の方を見ると……料理を下げながらよそ見をしていた。同じく、よそ見をしていた実咲が理香に近づいて……

ガシャーン！

音楽にかき消されそうだったが、ケンはその音を聞き逃さなかつた。会場が明るくなつたので、ケンが現場に急行すると……

「てめえら、何やつているんだ！！」新婦親族席の新婦伯父にあたる男性が理香と実咲を怒鳴りつけていた。

ケンはドリンクコーナーにあつたおしほりを掴み、その席へ駆けつけた。

「申し訳ございません。チーフの山本でございます。如何なされましたか…………」

「こいつら、何やつているんだよ……」理香と実咲がよそ見をしていて激突。下げる途中だつた料理の中身がお客様のズボンに掛かつたとのことだ。

酔っているのか、真っ赤な顔をしたその人は「おい、てめえら」と怒鳴り始め、友人たちもこちらを注視しているので、とりあえずズボンを軽く拭ぐと、ロビーに出てもらつた。

何とかロビーの椅子に座つてもらつたものの、お客様は関係のないここまで毒づき始め、今にも殴りかかりそうなほど怒つている。ロビーの離れた場所では、理香と実咲、その方の奥さんがこちらをじっと見ている。

酔つてしまつとこの主人、奥さんでも手に負えないのだろう。奥さんがブチ切れたご主人のことをおろおろと見ているケースは珍しくない。

もちろん、この類のトラブルでバイトの手に余るときは、助けを呼ぶことができる。

ケンがインカムに向かつて

「エメラルドのロビー、コードG」と言えば警備員が来てくれる。

喧嘩や殴られた場合はすぐに呼ぶ決まりだ。（Gはガードマンの略）そこまで行かなくても「エメラルドのロビー、コードM」と言えば、現場では手に負えないトラブル解決のために待機している支配人か副支配人クラスの人々が来てくれる。（Mはマネージャーの略）

が、ここで支配人を呼んでしまつと、原因の追及がなされ、上司の主任は厳重注意、理香たちはクビになつてしまつかもしれない。ケンはもう少ししゃってみようと思つた。

「何でこんな所に連れ出したんだ!/? あいつらによ一く説教するからここに連れてこい」から始まって、一方的にまくし立てているので、しばらくしゃべらせておく。

「……様……。本当に私共の不調法で申し訳ございません。ですが……もしよろしければ、お式がお開きになるまで、お収めいただけますでしょつか?」

「はあ?」

「今日は、お一人の一生に一度の晴れ舞台です。お一人をお開き口までお送りするまでは、私たちは……、お式がお開きになりましたら、喜んでお叱りをお受けします……」

ケンは、とにかく披露宴を無事に終わらせたい」とを語つた。

「分かつた。あんた……プロじゃの? もひえ。中に入るわ。酒も飲みたくないし」

「ご主人は、少し仮面だつたが、奥さんに伴われて会場に入つていつた。

と、理香と実咲が駆け寄つてきた。

「ケンさん、すみません」「『めんなさい』田からは涙がぽたぽたと垂れていた。

「理香……だから言つただろう。軽く考え方やダメだつて」「はい、『めんなさい』理香は泣き崩れてしまった。

「山本くん、そろそろキャンドルだよ」とインカムから黒服の声がしたので、ケンは理香を抱え起こし、軽くハグすると会場に戻つた。

戻る前、理香と実咲に「キャンドルサービスの間は何もしなくて良いから、会場に入つてよく見ていいよ。だけど、あとは仕事に集中する」と、と言つておく。

（もともとキャンドルサービスの間は配膳禁止なので、その間に配膳係は裏で一休みしている）

呆けたように綺麗な新婦を見つめる理香たちに見守られながら、キャンドルサービスが済み、カラオケが始まると、ケンはさつきの伯父の奥さんに呼ばれた。

「主人が失礼なこと申し上げてすみませんねえ。あ、クリーニング代ですか？　いいですよ。この式が終わつたらどうせクリーニングに出すつもりだつたから。」

（クリーニング代は経理に言えばそれ用の金一封を出してもらえるが、始末書を書かなくてはならない）

件の伯父はと言えば、さつきのトラブルなど忘れたかの如く、親戚連中と一緒にわいわいと盛り上がっている。

披露宴お開きの少し前、ケンは指示を受けた。

お開きの後に対応するロビーの係が足りないので、ケンと理香は会場の片付けではなく、ロビーの方に回つて欲しいと。

花束贈呈では、新婦の涙ながらの手紙に目頭を押さえる理香と実咲。だめだなあ……プロがこんな所で泣いちゃあ……

× 4840 — 403 ×

お開きの後、理香を連れてロビーに出ていつもの案内の仕事に就く。シャッター押しを頼まれたり、トイレや更衣室の場所を案内するとき以外は、ロビーの隅に立ち、新婦をじっと見つめている理香。

と、やつさの伯父たち親戚軍団がケンと理香の所にやつてきた。理香は怯えた表情になる。

「いたいた、この子だよ。」（新婦）に見とれて料理こぼした子は。お姉ちゃん、そんなに怖がらなくていいよ。やつさは「めんな。怒つたりして」

「い、いえ……本当にすみません。」「めんなさい」

「姉ちゃん……、どうだった。」

「はい、すごく綺麗でした」

「そうかそうか……うれしいなあ。おーい、ちゃん」伯父は新婦を呼びつけた。

「はーい」新婦は、ピンク色のドレスをカサカサさせながらやってきた。

「ちゃん。」お姉ちゃんなんだけど、あんたが余りにも綺麗だから、見とれて料理をひっくり返したんだ」

「伯父さん、そんなこと言ひちゃんかわいそうですよ」

「そうだ、写真を撮りつ」と伯父と新婦が並んで、ケンの手元にカメラが渡された。

理香がケンの方に移動すると……「あんたもこいつち来なさい」

「えつ」……

「まったく、伯父さんつたりあ。しうつがないわねえ……お姉さん、良かつたら入つてもらつていい？」と新婦もにこにこしている。

「は、はい」

新婦と伯父と（スタッフである）理香といつ、奇妙な記念写真が撮れた。

新郎新婦が控室に戻り、お客様がロビーからいなくなつたので、忘れ物の点検に入った。

誰もいないロビーを見回り、多目的トイレに入ると……理香もつこ

てきて扉が閉められた。カギまで掛けられる。

「理香？」

「ケンさん……私、怖かった。」「めんなさい」

「ごめんなさいって……許してもらつたから良いんぢやないの？
表沙汰にはなつていないし、お客様さんから『眞に入るよ』に言われ
るなんて滅多にない……」

「でも、でも…………」「ぐすつ、ぐすつ

「理香……」

「ケンさん、今日、泊まりに行つていいですか？」

「えつ」

「ダメですか？」

「そうじやなくて、泊まりに来るつて……俺、理香のこと好きだから、我慢できなくなるかも」

「いいですよ。そのつもりです」理香はそう言つと、真つ赤な顔をして唇を突き出した。ケンはそつと唇を合わせた……理香のファーストキスは何とトイレの中と言つことだ。

その晩。理香はケンのアパートに泊まつた。

全てをケンの前にさらして、初めての経験を済ませた理香は、ケンの腕枕で一晩を過ごした。

ケンと理香は本格的に付き合つようになつた。

ケンに惚れ込んだ理香、ケンのことが大好きでたまらない様子で、よくアパートに泊まりに来てくれて、女性の悦びを覚えた。

6月の婚礼ピーク時も、ケンと理香は毎週のように仲良く働いた。

デートに行くにも、一人ともあまりお金がなかつたしwww

ケンと理香の間柄はいつの間にか公認となり、バイトのリーダー格のケンの女に手を出そうとする者はいなかつた。

といふか、理香はそんなに美人というわけでもなく、ここは女性の方が人数が多いので、余程性格が悪いか醜男でなければ彼女を見つけることができた。

「ねえ、ケン……一緒に住もうか？ 家賃もつたいないじゃん」

「俺もそうしたいけど、実家から親が出てきたらどうするんだよw

w

「あっ、そうか」と、こんなバカな会話をしているときが一番楽しかつた。

夏休みは結婚式がめつきり減り、バイトも少なくなるので、7月の試験が終わつた後は少しバイトをしながら研究室で勉強。8月上旬からお盆までは理香と時期を合わせてそれぞれ帰省。お盆休みが終わつたあと、理香と旅行に出かけた。

夜行快速を利用して大阪へ。安いビジネスホテルに2泊、車中泊2泊の合計5日間。泊まったビジネスホテルは意外と壁が薄く、静かに過ごせざるを得なかつた。

【満開】ケンと理香、最高の一瞬

10月に入ると、秋の結婚式シーズン。休日は殆どバイトの予定で埋め尽くされた。

とある金曜日の朝。ケンの携帯に「グランドクリスタルパレスから電話があり、夕方に理香と一緒に来て欲しいといつ。理香に連絡を取り、17時すぎにグランドクリスタルパレスへ。

事務所に顔を出すと、ケンの上司の主任と支配人がやつてきて言った。

「山本君、明日なんだが……披露宴会場でルームキヤップの黒服をやつてくれないか?」

「ええっ!」ケンと理香は驚いた。ルームキヤップの黒服と言えば、経験3年以上のベテラン社員が勤める会場の総責任者。どうしてバイトに……?

明日は大安ということもあり、全会場がフル回転するのだが、黒服の出来る社員が相次いで不幸や病気で休む事態になつたそうだ。

「でも、僕はバイトで責任が……」

「受注課長が横で見ていて、分からないとこはインカムで指示をだすから」「

「それなら、どうして課長さんが……あつ、そつかー!」

受注課長はバイクに乗つていて走行中に転倒。腕をギプスで固定しているんだつた。ギプスをしている人がルームキヤップなんて出来るわけがない。

更に、ケンはバイトでりながらベテランの証である銀バッチの着用を許されている。

そして、ケンが勤める予定だったスポット係には理香を抜擢すると
いう。

ケンは被服室に連れて行かれ、黒服をあてがつてもうつた。
黒服に蝶ネクタイ。白い手袋を付けると、我ながらそれらしく見えた。

「ケン……かつこいい」

「理香ちゃん、彼、格好いいだろ。でも、スポットで照らすのは彼
じゃなくて新郎新婦だからね」

「もうつ、馬鹿にしないで下さい」皆で大爆笑。

明日ケンが担当する「ルビーの間」に移動し、陰で見守ってくれる受注課長と主任を交えて改めて打ち合わせ。ケンは普段から黒服の動きを見ていたので、飲み込みは早い。立ち位置や手の差し出し方などを確認した。

「主任、復習したいからここ使つていいですか?」

「うん、しつかり頼むね。俺たちは夜の宴会でいなくなるけど……」

「はい」

「あ、ちょっと待つて……」

「はい?」

「理香ちゃん……折角だから、いっつおりいでよ」と主任に被服室に促される

「????」ケンと理香がくつついでいくと、主任は一角を指し示して「折角だから着てみたら」とニヤニヤ笑った。

「ええつ? いいんですか?」

「ああ。今シーズンはどうせ捨てる服だから」

主任が指さした先には、ウエディングドレスが吊してあった。貸衣装屋が使わなくなつたドレスを何着か分けてもらつてしまつてある。ドレスが急に汚れたり、時にはドレスあわせから太つてしまふ新婦さんがいるのでその時に使ってもらつたりと、たまに役立つてゐる。

シーズンが終わると、貸衣装屋からドレスがもひぐるので、JUNのドレスは処分するというわけだ。

(貸衣装は3回貸せば元が取れるので、貸衣装屋は毎年ドレスを新品にしてくる。)

理香は呆けたような顔をしてそれを見ていると、主任に呼ばれた経理課の女性スタッフがやってきて、ケンたち男は追い出された。

「理香……きれいだよ」化粧や髪型はいつものままだが、自分の彼女のドレス姿に思わず見とれてしまつ。レンタルの造花ブーケもしつかりと手に持つて居る。

「山本君。黒服が花嫁さんに見とれてちゃだめじやないか。さあ、練習練習」「会場に連れていかれた。

「ねえ、ケン……裾踏んづけて転んじゃいそつ

「理香、ドレスの裾は蹴飛ばすようにして歩くんだよ」

バサツ、バサツ ドレスが擦れる音がした

「ケン……こんな格好、とても人には見せられないね

だだつ広い会場には、黒服姿のケンとドレス姿の理香だけになつた。既にテーブルと椅子、引出物がセッテされて居るところで理香に新婦役をやつてもらい、ケンは誘導方法を復習し、引き続きキャンドルサービスの練習にはいった。

「それでは、新郎様、右手でトーチを持つて下さい。左手は新婦様の腰に回ります。新婦様の右手はトーチ、左手はブーケを持つたままで……」

「ねえ、ケン。実際にやつてみよつよ

「どれどれ」ケンは理香の腰に手を回し、トーチを持つ仕草をした。

実際に火はつけないが、テーブルをひとつひとつ回って付ける真似をする。そして、メインテーブルのブライダルキャンドルに点火する真似。がらんとした会場に沢山の椅子とテーブルが並ぶ光景。自分もこんな式を挙げる事つてあるのだろうか……ぼんやりと会場を見ていると、

「ねえ、ケン……ケーキカットもしてみない？」と理香。

「うん」

高さが3m近くある作り物のケーキ、手元の一部分、小箱ぐらいの大きさのスペースがぽっかりと空いている。

明日、そこだけ本物のケーキが埋め込まれるのだ。

ケーキの前に進み、ナイフを一人で持つ。そして、ぽっかりと空いたところにナイフを差し込む。

「ケン……私……」

「理香？」

「ケンのこと大好き」「俺もだよ」

「私、私…………」「？」

「卒業したら、ちゃんとドレスを着て、ここでケンと……」

「えつ」

「ケンと一緒にになりたい。ここで式を挙げたい」

「理香…………」

「ダメ?」

「ダメじゃないよ。俺もそうしたい。そりやつ、理香、『めぐ』

「えつ?」

「本当は俺から言わなきゃいけなかつたのに。理香に言わせてしまつて」

「そんなこと無いよ。私、ケンのこと愛している」

「理香、愛しているよ。一緒にならうね」

「そんなこと無いよ。私、ケンのこと愛している」

ケンは、ナイフをナイフスタンドに戻すと、理香と固く抱き合った。目をつぶつた理香の唇と自分の唇を合わせた。理香の呼吸が誰も居ない会場に響き渡っている……と、

いつのまにか、会場が暗くなり、スポットが当たられ、ムード溢れる音楽が流れていた。

理香は潤んだ目をして、ケンのことにより強く、ぎゅっと抱きしめてた。ケンも…………あれ？ どうして照明が変わったり音楽が流れているんだ？？

程なくして、会場から拍手が起こっていた。あわわわわっ。

「主任！ 課長さん！ 支配人まで…………どうしたんですか？」 10
名近いスタッフが集まっていたのだ。

「山本君。ケー キカットでキスはしないんだからな。当田そんな演出したら許さないぞ」と誰かがおどけて言うと大爆笑の輪が起こった。

「あんたたちがなかなか降りてこないから、覗きに来たら…………エッチ

「それで、支配人が悪戯で音楽と照明を切り替えたんだ」

理香はケンの後ろに隠れて、茹で蛸のように真っ赤な顔をしていた。

翌日。ケンは無事に大役を務めた。

この日、ルビーの間では連続して2席の結婚式が行われたのだが、2席目ともなるとケンにも自信が付き、スーツ＆ギブス姿で会場の隅に立つていて受注課長からの指示も殆ど無かつた。

3年生の秋ともなると、そろそろ就職を意識する季節。

北東北出身のケンと静岡出身の金谷理香。まずケンが東京で就職することにした。ケンの1年後に理香も卒業するので、卒業と同時に結婚。

「理香、本当に（俺なんかで）大丈夫なの？」と、アパートでの会話。

「うん。てか、今からでも籍入れたいけど、だめ？」

「ちょっとまずいよ。新卒の学生が既婚者なんて企業の求人担当者がドン引きしちゃうから。せめて理香が卒業して就職しちゃえば籍入れてもいいかもね」

「うん」そう言つと、理香はケンの上にのしかかつてきて、いつものように唇を押しつけてきた。

グランドクリスタルパレスで式を挙げるカップルは人それぞれだが、新郎の中には35歳を超えてやっと相手を見つけたという方も多い。頭がすっかり薄くなつた新郎さんを見ると、自分はどんなに幸せなのだろう。

「幸せになつて下さい」とケンは真剣に思いを込める。まだ未熟ではあるが、心のこもつたケンのサービスは常に好評だった。

年が明け、期末試験が終わると企業研究。ケンは、メーカーで開発部門の仕事をしたかったので、それに的を絞つて情報収集。

帰省も最低限にして、底冷えのするアパートで色々調べて過ごした。

4年生の4月。

いよいよ本格的な就職シーズン。

セミナー や説明会が各社で開かれ。ケンは精力的に活動した。

一流の会社に入り、理香と幸せな家庭を築くためだ。

が、理香と会える機会はめっきり減ってしまった。今まで毎日のように会っていたのが、週に1回あるかないか。

しかも、セミナーなどに早く行くなどの都合で泊まりは控えてもらつた。

理香は不満そうだったが、一流企業の内定、いや、内々定をもらえば自分の埋め合わせはできる。

心中で理香に説ぎながら、ケンは企業回りを続けていた。

【花吹雪】ひすみ、そして……（前書き）

いじから先は、ケンと理香の話になります。（会場係の話は殆どありません）

【花吹雪】ひすみ、そして……

5月のある金曜日。一流メーカーに勤めているセントラル大学の先輩方と繁華街の飲み屋で会つて話をした。就活対策の裏話を聞ける貴重なチャンスで、先輩も出身大学の後輩を入れたいために熱心に語つてくれた。

二次会の後、先輩たちはいかがわしい店に行くからと誘われたが、（婚約中の身である）ケンはそれを断つて駅への道を急いだ。明日の土曜日は一日空いている（仏滅のため、結婚式＝バイトもない）ので、理香と一日たっぷりと過ごすことができる。早く帰つて部屋を片付けて休まないと…………

そう思いながら、駅への近道であるホテル街を抜けた。それにしても、あまりにも凄い数のカツプルに苦笑する。若いカツプルから親子ぐらい年の離れたカツプルまで。

と、あるホテルの前で、ホテルから出てきたカツプルと鉢合わせ。

えつ……まじ？…………どうして？？

理香と、グランドクリスタルパレスの後輩がホテルから出てきた所だった。

「あつ」「えつ」

理香はケンに気がついた。目を大きく見開いて、ケンを見つめた後、目を逸らした。

後輩の男は気がつかない。

ケンは、二人を怒鳴りつけることも思いつかず、二人の前を足早に去るしかなかつた。

ケンの頭の中はパニックになっていた。

理香と幸せな家庭を築くために身を粉にして就職活動しているのに、理香は男とホテルでデート……何で？ ビックリして？

呆然としたまま、電車の中からケンは理香にメールを打った。

『理香……分かっているよな。どういふこと？ 明日、ちゃんと説明してよ』

すぐに返事が返ってきた。

『ケン……『めんなさい。許して下さー』。明日行きます』

翌日。約束より1時間遅れて理香がやってきた。

玄関で立ちすくんでいるので、とりあえず中に入つてもらつ。目の前に座つている理香、昨晩は他の男と触れあつていたのだ。今まで、俺しか知らなかつたのに、今の理香は他の男のそれを知つてゐる。ケンは情けなくて、悔しくて、理香のことをまともに見られなかつた。

「理香。確かにお前なんだよな？ アレは」

「はい。本当に後悔しています。『めんなさい。許して下さー』。一度としませんから」

「理香、どうしたの？ 僕のこと嫌いなの？」

「ち、違います…………」理香はたどたどしく説明した。

4月に入り、ケンが就職活動で忙しく、会つてもうえなくなつた。バイトに行つてもケンの姿はなく、淋しくてたまらなかつた。そんな中、バイト仲間で飲みに行つて、仲間に愚痴つていると、バイト仲間の男後輩が言い寄つてきた。酒の量も増え、甘言に乗つてホテルに付いていった。

「ケンが悪いのよ。私にかまつてくれないから」と心の中で言い訳をしながら。

といひながら、用事が済んで後始末を始めると理香は激しく後悔した。やつぱりケンが好きだった。どんな償いでも……と。

隣でたばこを吹かしている後輩を尻目に、理香は浮氣したことを激しく後悔。でも、済んでしまったことは仕方がない。と気を取り直した。

とにかく、彼氏面して、べたべたまとわりつく後輩とは駅までは一緒に行くとしてもそこで別れ、後の誘いは断ろう。「あれは酒の席での過ちだった」と。

そして、ケンには黙つていれば、時の流れが今日のことを忘れさせてくれるに違いない。早く忘れよう。避妊は確実だったので、一生口を拭い、この秘密は地獄の果てまで持つて行こう。その分、ケンのことを愛し抜いて……そう考えていたのだが、ケンに見つかって田論見は外れた。友達に相談したら「謝り倒すしかない」と言われて……

「理香、ふざけるなよ。『会えなくて辛い』のは俺も一緒だ。理香、俺はお前と一緒になる約束をした。そのために就活がんばっているのにじどうこう事なんだよ」

「だから、淋しかったの。会いたくてもあなたは会ってくれないじゃないのよ。ひどいよ……！」

「だから、何のために俺が……」

「だから、じうやつて謝っているんじゃないの？ ケンだって女人何人も知っているんでしょ！」

「だからあー！ 分かつてないんだよなあ 確かにお前と付き合つ前はそうだ。だけど、お前と付き合ひだしてからは一度だつて浮氣したことないのにー！ 開き直つている場合か？」

「うわーーーーん！！」

「理香、泣いて誤魔化すなーーー！」

「だったら、どうしようっていうのよ？」

「今日は”帰ってくれ。昨日のこと思い出すとムカムカする

「えつ？」

「帰れって言つたんだよ」

「分かりました」

理香は、部屋の中に置いてある自分の歯ブラシや下着、パジャマなどをまとめ始めた。

ケンは、そこまでは言つてないのだが、理香がそうしたいのなら勝手にすればいい。

理香の大きな尻や、スカートから伸びているむちうとした柔らかい太ももも、今は恥まわしく見えるだけだった。

荷物をまとめた理香は無言のまま部屋を出て行つた。

ケンは、理香が出て行つた部屋で一人呆然としていた。

何のための就職活動だつたんだろう。理香と幸せになるためのではなかつたのだろうか？

窓から見える都会の町並みが煩わしく思えた。1年ちょっととだつたが、理香との思い出が詰まつている都會が嫌だつた。

月曜日、ケンがキャンバスを歩いていると、ケンの前を理香と男が並んで歩いていた。

後ろ姿は間違いなく理香。理香の着ているカーディガンはケンと一緒に買ったものなので間違いない。

ケンはそんな理香と顔を合わせるのが嫌だつた。

元の恋人から新しい男を見せつけられるなんて、そんな惨めなことはない。ケンは、手近な建物の中に飛び込んで身を隠した。そこは

偶然にも「就職情報室」。

ケンはヒターン就職でもしようかと考へたが、田舎のメーカーでは開発系のエンジニアは募集していない。

中央で開発したものを作り人件費の安い田舎で生産することが多いからだ。工場での「生産管理」ならいくつもあったが、開発とは畠違いだ。愛知や大阪ならあるなかあと、ある求人に目が止まつた。

「製品開発リーダー候補募集」 北関東の小さな田舎町にある、従業員200人の中核工業ながくというメーカーだ。緑豊かな山の中に本社と工場があり、自社開発の精密機器などを生産している。

田舎のメーカーってどんな雰囲気なんだろ？

今まで大手メーカーばかり回っていたケン、気分転換とちょっとした小旅行のつもりで見学してみるか……と軽い気持ちでアポイントメントを取つた。

当日、新幹線に乗り、指定された駅に降り立つと社長自ら新幹線の駅まで出迎えてくれたのにはびっくり。工場への道中、自分が築き上げた会社の将来性について熱心に語つて入社を勧めてくれた。緑豊かな工場には大勢のスタッフが働いていた。垢抜けではないが、若い女性も多く…………そんなことより、社長以下スタッフが心を込めてなしてくれ、せっかく来社してくれたセントラル大学の学生を離すまいと必死になっているのがよく分かる。

半日話をしただけで素行調査に問題が無ければ即内定を出すとまで言われた。

(調査されても問題となるようなことはないので、ケンにどうしては即内定と同じ事だ)

ケンは、半ば自棄でそれに応え、就職活動を6月で終えた。

就活は済んだといつても研究室での卒業研究は思いのほか忙しく、グランドクリスタルパレスでのバイトと大学でいっぱいいっぱいの

日々。

バイト仲間は、当初、理香を振ったケンのことを非難した。しかし、例の後輩が「理香から誘われてホテルに行つた」と吹聴して回つたことからケンへの誤解は解けたが、理香はグランドクリスタルパレスに来ることではなく、締日を過ぎると理香とその男のタイムカードが消えていた。

理香とつきあつていた時のケンは、新郎新婦をお祝いするんだ、といふ氣概に満ちて仕事をしていた。でも、今では淡々と仕事をこなすのみ。ルームキヤップも何回かやつたが、特に感情は沸かなかつた。立て板に水の如く、ベルトコンベアに乗せてきつちりと送り出すだけだ。アンケートハガキによるお客様からの苦情はなかつたが、感謝の言葉もなかつた。

また、地方への就職を控えていることから彼女を作ろうといふ気が起こらず、後輩への接し方も丁寧ではあるがクールだつた。が、ガツガツしていないところが却つて女の子の好感を呼び、「先輩以上恋人未満」という立場で1年生の子と何となく遊んだことはあつた。

10月のある日。

図書館で理香の友人に呼び止められた。理香と付き合つていた頃は時々飲みに行つたこともある子。別れた理由が理香の浮気、ということも知つている。

「こんにちは…………ケンさんはどうしているんですか？　内定しましたと聞きましたが」

「うん。もうすぐ卒業だから、バイトも減らして、研究しながらぼつぼつ過ごしているよ…………」

「ねえ、ケンさん。……理香が荒れて大変なの。連絡取つてあげてくれない？」

「えつ？」

理香はケンと別れ、グランドクリスタルパレスも辞めた後、居酒屋で新たにバイトを始めた。

でも、淋しいのか、格好いい男の子を見つければ声を掛け、遊ばれて捨てられることを繰り返しているといつ。

「いつも違う男の人とくつついている理香を見ると私、悲しいよ。見ていて分かるんだけど、やっぱりケンさんのこと忘れられないのよ。ねえ、電話してあげて」

「でも、俺と別れてから理香は電話番号替えてるんだよね」「はい、新しい番号。これね。」

気が進まなかつたが、婚約までしておいて別れたのだから放置していいとは言えない。

ある夜。

思い切つて理香の所に電話を掛けた。でも、一向に出る気配がない。口を変えて何回か掛けても出てもらえないでの、ケンはあきらめた。まあ、男には不自由していないんだつたら、いいか、と。

そして、卒業。グランドクリスタルパレスの後輩が飲み会を開いてくれて、ケンの大学生活はおしまい。

社会人となつたケンは、北関東のメーカーで製品開発に明け暮れる日々がはじまつた。

先輩や同僚は合コンに誘ってくれるが、理香と嫌な別れ方をした心の傷は癒えない。しばらくは彼女を作らず、仕事に打ち込むことを優先した。

5年後の夏。26歳になつた理香は北関東のある街にいた。理香は

経済学部を出た後、経営コンサルタント見習いとして小さな事務所に就職。工場の視察のために泊まりがけの出張に来ていたのだ。大学を出てからも彼氏を作ろうとしたが、なかなか上手くいかず、今はフリーの身。

駅前のプリンセスホテルにチェックインした後、駅前商店街の小さな本屋に入ると……

なつかしい山本ケンが立ち読みしていた。

理香は全身の血が逆流するような懐かしさを覚えた。

「ケン……こんな所にいたんだ」

別れて半年後の秋。ケンから何回も電話がかかってきたのは知っていた。

しかし、当時は男から男へ渡り歩いていた時期で、ケンに会わせる顔がなかつた。

が……電話が途切れでから、却つてケンへの想いが募つてきた。理香は何度も工学部で待ち伏せしようとした。

「私の卒業まで1年待ってください。私もあなたの街について行きます。あなたとやり直したいです」という言葉まで用意した。でも、工学部へ足を踏み入れるのをためらっているうちにケンは卒業し、知らない街へ去つていった。

自分の踏ん切りの悪さにはほどほど嫌になつた理香だった。

そのケンが目の前にいる。

理香は動搖と飛びつきたい気持ちを隠したまま（27歳の）ケンに近づいた。

「あら、ケンさん……」無沙汰。どうしたの？

ケンは時間があるので、理香の泊まっているホテルの部屋に高級弁当を買って持ち込み、語り合つた。

「今、どうしているの？」理香は恐る恐る聞いた。

ケンは、新卒で入った会社・中部工業で開発部門の係長をしており、4歳年下の社長のお嬢さん・中部真帆さんに見初められて婚約。

1

0月に挙式のこと。

社長の婿養子の形となり、姓も変わってしまったこと。でも、この小さな町にすっかり溶け込んでいる様子で、すくなくせうだ。

理香は、動搖を隠すために「ワイン買つてくるね」と一田部屋を出た。

廊下に出た理香は、涙が止まらなかつた。

【花吹雪】ひすみ、そして……（後書き）

バッドエンドですみません。

もともと、山本ケン（中部ケン）は、社長の娘、中部真帆の旦那というポジションから書き始めたので、理香から見るとバッドエンドになってしまいました。

ただ、ケン自身も理香と別れてから真帆と付き合つまで、5年近く彼女無しの生活を送るなど、ショックは大きかつたようです。

そのケンが登場する作品。実は「ノクターン・ノベルズ」に所収されているR・18作品のため、ここでは紹介できませんが、18歳以上で抵抗のない方は探してみて下さい。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0968k/>

結婚式場バイト案内係・ケン

2010年10月9日13時22分発行